

連歌百韻「月は船火の」



賦何人連歌百韻 (電腦網千句第三番)

二〇〇八・九・一六―二〇一―一―一―一〇

於 サイバースペース

しづしづと月は船出のあかね空 樂歲

葦原わけて水夫を呼ぶ声 千草

ひしくひの小首かしげるをかしさに 蘭舎

ものの形にものを縫ひをり 梢風

火鬨斗より火花小さく瞬きて 千草

やがて朧の春のあけばの 歳

岩陰に蝶の眠りの深からむ 風

けしきばかりの柳しだるる 舎

草青む野辺に連れ立つ市女笠

草

足曳の山白雲をのせ

舎

折り込みの歌の謎とく楽しさは

風

あやのもつれをほぐしゆくとき

歳

心にもあらず入りたる法のみち

舎

おとなしやかに眠る唐猫

草

われもまたほのかな昔埋火に

歳

念ずれば頭(た)つ雪のあやかし

風

海原の彼のうねりの果てもなし

草

をのが羽音に驚きし鳥

舎

うすものを置き忘れたる朝の月

風

いつまたわたる夢の浮橋

歳

宇津よりもあなたに花の雲みえて

舎

尾そぎ髪の揺るるうららか

草

二才

古寺はひねもすゆるき春の風

歳

遊びせんとや誘ふ高声

風

舞へ舞へとわが名呼ばるるかたつぶり

草

水鶏のはしる文倉のうら

舎

卵採るをどこの指の節立ちて

風

刀を鋏にかへて幾年

歳

しづかなる谷戸には星の降ることく

舎

杉の秀つ枝に折からの月

草

旅ごろも身にしみてゆく露の原

歳

蜻蛉も寄る道のわかされ

風

牛の背の童の笛のおもしろく

草

日高くあるにつのるひだるさ

舎

きらきらと水面のひかる桂川

風

むすぶうたかた浮草の間に

歳

二ウ

身を捨つるころは千々に乱るるを

舎

すりあふも袖ふりあふも袖

草

春くれば都大路はにぎはひて

歳

轅の先を潜る蝶々

風

玉梓にうちそへらるるつづみぐさ

草

しのぶといふもけふの日はくれ

舎

うたてやなうたげ忘れしわが庵は

風

雪深くして人も通はず

歳

はしなくも鶴のおりたつ諏訪のうみ

舎

藪へもやらず松に吹く風

草

草枕明けやすき夜の月を見て

歳

山賤のいひ白くあらねど

風

なみなみの酒にさざなみ花莖

草

霞の衣幾重ともなく

舎

三才

つながれてうしとも思ふ猫の仔の

風

鈴にあはせて暮れがたの鐘

歳

千とせふる苔の下なる氷のおと

舎

心こごりて石となりぬる

草

秋ふかく雨にわかるるぬれ衣

歳

くまなき月を待つにあらねど

風

よし急やし柞の山をさまよふも

草

とこよのむしをかくす仙人

舎

わぎもこもその子も待つやいえづとを

風

早舟くだる空のしくれて

歳

むら鴉しらぬにしるき冬の枝に

舎

この世のあはれいはんかたなし

草

時ながれ辻のいしぶみ文字あせて

歳

うた枕こそいみじかりけれ

風

三ウ

天地にいきどしいきるものの声

草

つばなぬく野に夕日かたぶき

舎

ひとり来てひとりで帰るひとおぼろ

風

わかるる雁は春雨の空

歳

くれなるの袖より袖にうつす文

舎

なみだのあとかこきもあはきも

草

清水くむ深山隠れの月の寺

歳

むそぢの老いさいかに見るらむ

風

まそかがみ知らぬ翁のうかみ出で

草

冬にはさかぬ撫子のはな

舎

今日ばかり戸を開け放す狐狸の庵

風

ただ風を聞く人去りし里

歳

ひとり寝る夜のうらめしき鶏の声

舎

あはれ宿世の露の縁ぞ

草

いまは見よ錦装へるもみぢ山

歳

すめらみことは相撲望まれ

風

このたびもとづくにびとのかちなのり

草

一斗の酒を安々と乾し

舎

あやなしと思ふ闇夜の笑ひには

風

太刀抜きはらふもののふの影

歳

あと叫び消えにし女は何方へ

夢梯

うき名を流す鴨川の端

舎

これよりはもろこし舟のみをつくし

草

雪間にさせる日影ちりちり

歳

旅人も高ふ人も揉み手して

風

端の及りたる飯碗もあり

梯

かはりゆく郷のくらしのあはれなる

舎

なるの嘆きを伝ふ語り部

草



ナウ

薄墨の花老ひて舞ふ昼さがり

歳

たはれて赤きひれを振る春

風

君の住む鳥引き寄せむ強東風に

梯

かはらじとのみおもふ朧夜

舎

幾層の夢重なりて繭籠り

草

霧の帳の厚き奥へと

歳

曳く牛の耳にも届く秋の声

風

紅葉狩る野に昇る望月

梯

